

有権者の選挙での投票は個人の行動だが、それが集団や社会とどう結びつくのか。個人と集団の相互影響などを研究する社会心理学が専門の柿本准教授は「社会的アイデンティティー（自己同一性）」と「効力感」が、今回の総選挙のキーワードになると指摘

柿本 敏克

群馬大 准教授

する。柿本准教授 アイデンティティーとは、自分を自分たらしめているものといった自己概念。その中でも、私は野球が好きとか群馬県在住など、他の人と一緒にになったレベルで持っている意識が社会的アイデンティティーで、政党への支持もその一つだ。外国に行っ

た時に日本人だと強く感じるように、政権交代の瀬戸際の時には、自分が属するカテゴリー（範ちゅう）はどこかを強く意識するようになるはずだ。与野党支持者とも意識が燃え上がり、投票率は高まるだろう。

ただ、意識の高まり方は、与野党の支持者で異なる点もあるという。

柿本准教授 与党支持層は挑戦を受けており、その場合、既得権を守る考えが強くなる。一方で、参院で多数を占める野党支持層は、衆院での不当な立場を変えるいい機会と考えるし、強い集合行動も生まれてくる。

その集合行動を支える

アイデンティティーと効力感

'09 ぐんま衆院選

選ぶ

中

識者の視点

るのが、二つ目のキーワードの「効力感」なのだという。

柿本准教授 効力感とは、自分の行動が結

集団行動に作用

は主義主張ではなく、実利を求める。だから取り込むためには、政党はどれだけ実利に訴えるメッセージを発信

できるかが重要になる。社会的リアリティという問題もある。絶対的基準を持っている人はそれで判断するが、多くの場合は違つ。周りの人がどういつているか、多くの人がどう思っているか。それを社会的リアリティと呼ぶ。選挙なら、その政治領域について信頼、話ができる仲間、友人、同僚などの意見。また、人は切迫感があり、何とかしなきゃと思うときほど情報を求める。だから、政党は主張にどれだけ切迫感を持たせられるかを考えるべきだろう。

（聞き手・塩田彩）

果に結びつくだろうという感覚だ。今まで、投票しても変わらないと思っていた人たちが、1票の影響力があると思つて行動する。うまく成果が上がれば、自分が状況をコントロールできると感じるようになる。

では、無党派層はどう行動するのか。柿本准教授 無党派



かきもと・としかつ 群馬大准教授。専攻は社会心理学。65年大阪府高槻市生まれ。山形県立米沢女子短期大学助教授などを経て、06年から現職。